

『児戯笑談』 解題と翻刻(二)

脇山, 真衣
伊万里特別支援学校

<https://doi.org/10.15017/2547985>

出版情報 : 文献探究. 56, pp.38-51, 2018-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

『児戯笑談』 解題と翻刻(二)

脇山真衣

本稿は、「『児戯笑談』 解題と翻刻(一)」(『文献探究』第55号)

凡例

の続稿である。『児戯笑談』は近世中期に活躍した庶民教導家、中村

三近子の作品である。三近子は寛文十一年(一六七一)生、寛保元年

(一七四一)没。幼少期に山崎闇齋に師事し、宝永五年(一七〇八)

頃から二年ほど尾張に出仕した後、京で三近堂なる私塾を開いたとみ

られる。徳川吉宗の改革によつて庶民教化の機運が高まった享保年間、

京で庶民教導に精を尽くした人物である。本書は、半紙本四卷四冊、

寛延二年刊。特に卑賤の教訓に力を入れていた三近子は、すべての人

が「善念」を有する「善人」であることを根拠に、卑賤の学問の可能

性や必要性を説く。詳しい解題は前稿を参照頂きたい。

本稿の底本は九州大学附属中央図書館読本コレクション(読本Ⅱ、

4/寛延2/ナ・1・1-4)による。

一、本文には適宜、句読点、濁点、半濁点を付した。

一、字体は通行のものに改めた。

一、疊字は「ㄥ」「ㄷ」「ㄸ」「ㄹ」等で表し、二字以上は「ㄱ」「ㄴ」

で表した。

一、ルビと送り仮名の一部が重複している箇所はそのまま翻字した。

一、本文・ルビ中の不審箇所には、ルビ中に(ママ)と記した。

一、丁うつりは、「(丁数・オ/ウ)」とし、原則底本の丁付に従った。

児戯笑談卷之三

中村平吾三近子撰

近思録に買^{ひつを}櫃^{かいたまを}還^{かへすのつへ}珠^{たま}之^の費^ひといへり。鄙^{いなかもの}人^{ひと}京^{きやう}の小^{せう}間^ま物^{ぶつ}屋^やにて、木^き櫛^し式^{しき}刃^{やいば}に買^{かひ}けり。金^{かね}一^{いち}両^{りやう}つかわし、相^{さう}場^ばは六^む十^{じゆ}目^めなり。今^{いま}五^ご十^{じゆ}八^{ぱち}刃^{やいば}のつり銀^{ぎん}を渡^{わた}せといひしかば、亭^{てい}主^{しゆ}心得^{こころえ}かけ、袂^{たもと}より金^{かね}一^{いち}両^{りやう}取出^{しゆ}し、此^{こゝ}金^{かね}此^{こゝ}間^ま五^ご十^{じゆ}八^{ぱち}刃^{やいば}の方^{かた}へうけ取^{とり}候^{こう}。すなはち釣^{つり}に進^{すす}じ候^{こう}とて、出^でしけり。

どふやらこふやら式^{しき}刃^{やいば}の櫛^しが、たゞに付^つたりとぞ、軍^{ぐん}策^{さく}もかやうの筋^{すぢ}にて敵^{てき}を欺^{あやむ}くはかりごと多^{おほ}し。」「(1・才)

中庸^{ちゆうよう}に夫^{ふう}婦^ふ之^の愚^ぐ可^か以^り与^よ知^ち焉^や及^{およ}二^に其^{その}至^{いたる}一^{におよんで}也^{なり}雖^{しか}二^に聖^{せい}人^{じん}一^{ひと}亦^{また}有^あレ所^{ところ}不^あレ知^ら焉^やといへり。此^{こゝ}至^{いたる}るといふは、至^し極^{ごく}の理^りといふ事^{こと}にあ

らず。至^し理^りにおゐては、聖^{せい}人^{じん}の知^ちきはめざる事^{こと}なし。至^しるといふは、いたらぬところもなく広^く大^{たい}なるといふと云^い弁^{べん}あたるといふべし。聖^{せい}人^{じん}は天文^{てんぶん}地理^{ちり}まできはめ給^{たま}はざる事^{こと}なきとおもへば、孔^{くわん}子^しも旅^{りよ}にて津^{しん}を御^ごたづねありしごとき。ひろき事は聖^{せい}人^{じん}もしりたまはぬ事^{こと}、伏^{ふく}義^ぎの神^{しん}聖^{せい}なる仰^{あをいでて}視^し二^に天^{てん}象^{しやう}一^をとあり。神^{しん}聖^{せい}といへども、天^{てん}文^{ぶん}は心^{こゝろ}中^{ちゆう}にて推^{すい}察^{さつ}」(1・ウ)ばかりし給^{たま}ふ事^{こと}なり。天^{てん}へ行^いて見^み届^{とど}け給^{たま}はぬゆへ、天^{てん}象^{しやう}を見るとあり。これ至^{いた}る大きな事は聖^{せい}人^{じん}も知^ち事^{こと}あたはず。函^{かん}人^{じん}は具^ぐ足^{そく}にくわしく、矢^し人^{じん}は弓^{きゆう}矢^やの事^{こと}をしる類^{たぐひ}、かやうの事^{こと}多^{おほ}きひろき事は、聖^{せい}人^{じん}も

しる事^{こと}あたはざる也^{なり}。孔^{くわん}夫^ふ子^し何^{なに}もかもよく知^ちたまはば、なんぞ陳^{ちん}蔡^{さい}の間の厄^{やく}難^{なん}に三^{さん}日^{じつ}糧^{りやう}を絶^た給^{たま}はんや。弘^{こう}法^{ぽう}伝^{でん}教^{きやう}は知^ち識^{しき}の最^{さい}たりといへども、今日^{こんにち}独^{どく}鉗^{けん}三^{さん}鉗^{けん}をやめさせて、公^{こう}事^じ場^ばの檢^{けん}断^{だん}をつとめさせ、馬^まにまたがらして、敵^{てき}陣^{ちん}をふせがせたらば、暫^{ざん}時^じもそれに堪^たゆる事^{こと}あた」(2・才)はじ。天^{てん}下^げ万^{まん}物^{ぶつ}それごとくに知^ちところあり。かるがゆへに君子^{くんし}は物^{ぶつ}事^{こと}一人^{ひとり}に備^{そな}らん事^{こと}をもとめずといへり。

士^しと金^{かね}とは朽^くる事^{こと}なしといふ諺^{ことわざ}は、源^{げん}義^ぎ経^{けい}平^{へい}家^かを西^{さい}海^{かい}にて亡^{ほろ}されし時^{とき}より流^る布^ふせし言^{ごん}葉^{えつ}なり。義^ぎ経^{けい}は古^こ今^{こん}無^む双^{じやう}の勇^{ゆう}将^{じやう}にて、戦^{せん}場^{じやう}にすむ事^{こと}利^り那^なといへども、猶^{ゆう}予^よする事^{こと}なく、俗^{ぞく}間^まにいぶせき手^てなり。已^いに鎌^{かま}倉^{くら}殿^{でん}の代^{だい}官^{くわん}として、平^{へい}家^か追^{つい}討^{とう}の為^{ため}に夜^よを日^ひに継^ついで登^{のぼ}り、摂^{せつ}州^{しゅう}渡^{わた}辺^{へん}嶋^{じま}に着^あ陣^{ちん}し給^{たま}へり。平^{へい}家^か物^{ぶつ}語^ごには、大^{だい}風^{ふう}にて船^{せん}ども破^は損^{そん}せしゆへ、義^ぎ経^{けい}四^し五^ご日^{じつ}の逗^{どう}留^{りゆう}の処^{ところ}に」(2・ウ)事^{こと}なせしは誤^{あや}りなり。義^ぎ経^{けい}福^{ふく}嶋^{じま}に着^あ陣^{ちん}し給^{たま}へり。日^ひ比^ひの猛^{もう}勇^{ゆう}もやみ、三^{さん}日^{じつ}の間^ま唯^{ただ}茫^{ぼう}然^{ぜん}として、物^{ぶつ}おもひけるは、殿^{でん}はいかなる堅^{けん}陳^{ちん}といへ、ひたすゝみにすゝませ給^{たま}ふいきほひ、神^{しん}変^{へん}不^ふ思^し議^ぎとて士^し卒^{そつ}勇^{ゆう}み悦^{よろこ}ぶ事^{こと}かぎりなし。しかれば、今^{いま}ごろは八^や嶋^{じま}へ越^こてはななくしき合^あ戦^{せん}もあるべき所^{ところ}、此^{こゝ}二^に三^{さん}日^{じつ}殿^{でん}の顔^{がん}色^{しよく}すぐれず、御^ご不^ふ例^{れい}なりやいなやと問^とふ。義^ぎ経^{けい}の曰^{いわ}く、勇^{ゆう}氣^きも日^ひごろに倍^{ばい}せり。八^{はち}嶋^{じま}へ向^{むか}て、平^{へい}家^かを」(3・才) 蔑^みにする事^{こと}も掌^{てのひら}に握^{にぎ}りたり、たゞ一つ、わが智^ち慮^{りよ}に及^{およ}ばず。心^{こゝろ}にかゝるは、軍^{ぐん}用^{よう}の金^{かね}銀^{ぎん}なり。汝^{なんぢ}らも知

ごとく、我々は清和源氏の嫡流といへども、近年平家に狹められ、一身を置に所もなく、鎌倉殿は伊豆の北条に流人と成給ひ、我は鞍馬の奥に身を潜しより、さまでの年月も立ざれば、兄弟ともに軍用にともし夫戦のならひ、毎日士卒を上げますには、当座の褒賞金銀より外に重き物なし。今我八嶋へ行程の兵糧のみ用意して、士卒を励す(3・ウ)べき軍金なければ、貧將此術いかんともすることなし。故にすますと語り給ひけり。伊勢三郎が曰、其義ならば、疾にて仰を承るべき物にて候。幸奥州の商家吉次倍高、京堀川の御館に居申候。いそぎ御召、まづ彼を土に御取立有べし。しからば、御恩に感じ、いか程も軍用をつづけ申べしといへり。義経の曰、我も其事思ひよりしかど、いかに大切の軍用ともいへ、商家を物部氏の古になさん事、冥の照覧はかりがたしとの玉ふ。伊勢三郎が曰、大行不省二細謹」と申候(4・オ)とて、いそぎ吉次を呼下し、まづ伊勢三郎が対面して、源家の御運、今此時を得て草も木も偃す事、見聞の通り也。しかるに、我君舎那丸の時、其方辛勤せし事わすれさせ給はず。これによつて、此たび士に取たて給ふといひ渡し、そのうち御座ちかくめされて、御盃をたび玉ひけり。吉次は、とかうの言葉なく、たゞ感涙にむせび、次の間に立てかゝる御厚恩は、何を以てむくひ奉らんやといふ。武蔵坊が曰、いそぎ是より御軍用金をつづけ給へと云ければ、吉次それこそ(4・ウ)いとやすき御用とて、不日に万金をさし出せり。いかなる勇

猛の名將ともいへ、貧苦に智謀なく、又一人を土に取たつ事、かくのごとく大切なる沙汰なり。本武士、仮武士の差別、かくまで重き事にして、士と金朽る事なしの諺むべなるかな。俗間に、四百四病より貧ほどつらき物なしと判官殿のたまひし言、習せるも此時の事なり。松柏は、春夏秋冬の間は万木と同色なれども、冬枯になり、雪霜の中には、松柏斗り節操の色をかへず、本武士、仮武士、常はかはる(5・オ)ことなければども、間盛の時、雲泥にちがふ事也。義経の冥の照覧とおそれみ給ひしも、理なり。すでに吉次も末のとし、義経衣川にて、生害のとき、其軍場を逃のび、京へのぼり、佐藤忠信などは討死したれども、吉次は頼朝にめしとられ、さんぐ白状におよび、縋をみだしたる分野、これ付焼刃の士は、患難の場に処する事あたはずとぞ。斎藤別当実盛は、後代までも名高く、謡曲までも歌舞すといへども、志は忠実の武にあらず、勇悍の所はありといへども、忠臣の名をけがせり。(5・ウ)真盛は、義朝無二の郎等なり。夫に志をたてず、宗盛につかへて、名を塵せり。頼朝追討の為、平家惟盛を大将として富士川へ向はれし時、惟盛、真盛をめして、汝ほどの強弓精兵は、源氏にはいか程のありやと問れし時の返答、若き大将に臆病神を憐立る返答なり。軍には、かねて一寸も引まじきと覚悟してさへ臆しやすし。それに搦手へや迫らん。夜討にやよせんなど、心の引る様に答へけるは、曾て忠士にあらず、めつたに長生して、しやうことなし

に、篠原の「(6・才) 討死と見へたり。

凡そ世上の風俗、とかく殺変たるを器量とも異人ともいひて、鼓舞たつるゆへ、己もいよ／＼夫に移りて、常道を迂闊と見下し、異を辟愛好む人情にます／＼異を焚煙により、学文の中道も異道に落つ。吾朝の神道は、その要常といふ一言に約れり。王道の常を説ゆへ、万民神道の実理を好まず。古今の神道者、いき筋を強て神書を解といへども、世間に時行ず。仏法は、字々句々ともに、皆異を説ゆへ、貴賤ともに「(6・ウ) 心中よりすき好みて、日々に仏法は繁昌にいたる、殊更談

儀説法にもきれかわりたる口上なければ、参詣人もすくなき事なり。住持博学にても、安心一種にて如来の本願有がたく思ひとり、一向に念仏して往生の素情をとげ玉へと定規板本の説法にては、五人とも聴衆なし。又住持として頭ふり廻し、此本尊を何と見給ひたるや、是は木にて作れるものなり。すでに此心を誹諧に、

大分にしやばて仏になる檜」(7・才)

といひしごとく、草木から仏体色相の人間をすくふちからある物や、これは畢竟餅の像也と説出して、安心へおとすときは、さても上手の上人とて、寺院のくづるゝほど群集する事は、菩提より異をこのむ筋よりかくのごとし。

大徳令といふ物は、甚深微妙にして測がたきものなり。昔神のむかし太宰府の土とならせ給ひしかども、御廟の跡宮殿甍をならべ、神

識坊院軒をつらね、北野々御社善美をつくし、王公大臣も偈仰の頭をかたづけ、日本」(7・ウ) 国中に鎮座の跡を垂給ひ、八百余年の今に至り、日々奇験をあらはし給ふ所、朽る事なき神徳申も中々おろかなるべし。中にも御文章の対句、羅綺為二重衣一妬二無レ情於機婦一管弦在二長曲一怒二不レ関於伶人一との御作、ことさら神意になひて、此文章を称せん人は、天神其人の家へ三度かけりて守護せんとちかひ給ふとの事なれば、天神拝の時は、此御句を唱へ奉るべし。かならず其身に幸福を得べしと也。

符式といふ事は、上古黄帝よりはじまりて、古き」(8・才) 名なりといへり。後世是を御符ともいひ、又は祈祷ともいへり。大切な病にいたりては、上下の神祇にいのるに、丹誠、次第にかならず其しるしある事歴然なり。なま学問、なま物知のかきやぶりなる人は、まじなひ祈祷を愚痴なり。ごまのがう也とて笑ふといへども、それは己が私知のせまき所より出るに上なり。孔門の高弟子路さへ孔子の御病氣あやうく見へし時、かなしみにたへず。御病氣快然の祈祷をいたしとて、孔子に尋ねられし事、論語に見へたり。子路の「(8・ウ) 志は誠なり。病人に祈りを問はれしは、子路に似合ず、武王御病氣以外の外におはせし時、周公旦の身を以て武王の命にかはらんと丹誠を以て上下の神祇にいのり給ひしに、その翌日武王の病愈たりと商書金縢の篇にもつまびらかなり。

判官殿の曰、四百四病の内に、貧ほどつらい物なしとの玉ひしは実
説なり。貧は諸道の妨といひ、貧家には故人疎しともいひ、又人間
の用捨は在貧富ともいへり。貧乏といふに成ては、動れば(9・
オ)節操もくじやすく、夫からは、瓢心もおこりやすからん。一た
びくじけては、中々教訓勸学の届く物にあらず。悪念さへおこさず、
たゞ貧苦のみにしづまば、面々信ずる神仏に丹誠すべし。他念なく星霜
を積ば、などか納受なからん。かならず退屈なく、上にいふ易の盈
坎といふ心をとくと理會し、一足飛の果敢ゆきを好むべからず。これ貧
家の富貴を行る学問の道といふべし。古待宵の小侍従といふ女余り
貧しく有ければ、太秦の薬師に七日(9・ウ)こもりけれども、何
のしるしもなく、七日めの満願に

なむ薬師哀み給へ世の中に煩ふも病ならずや

と詠じてまどろみしかば、その暁の夢に戸帳の内より白き衣を給は
ると見て、いく程なく八幡の別当幸清におもはれて、栄花に成りしと
ぞ。是むかしにあらず。神仏は天地と共に古今の差別なく、其人の至誠
によりて感通のしるしあり。たゞ志を立てゝも、退屈して半途よりく
じけるこそ本意なけれ。

木曾義仲は朝日將軍とよばれし大将にて(10・オ)勇猛の大将の
如に古書にも書記せしか共、畢竟愚将と見へたり。いかに大力とも
いへ、わが妾の巴女に鎧を着せ、いつにても一方の大将として

敵陣にむかへられし事、曾て名将のしわざにあらず、義仲の臣に今井樋
口楯根井海野望月などいへる一人当千の兵ありしと書けれども、女を
大将にせしをもいさめず、結句折々は巴女が麾下につきしほどの文盲
なる郎等どもなれば、高が禄々たる者どもと見へたり。義仲やう／＼最
後の軍(10・ウ)と見へし時、四の宮河原にて気が付しが、巴女に義
仲が最後の軍に女をつれしと後代までいはれては恥なりとて、暇をや
られしとあり。甚以おそまきなるおもひ入也。高が木曾山家にそだち
て、学問なく無地に文盲にくらされしゆへ、一生内恥ばかり多かりけ
り。大将たる人は一言にても後代にのこりて、其人の剛臆も見ゆる事
なれば、文盲にては大将の号はゆるされず、太平記笠置の城軍の所に、
寄手の内、陶山小見山の兩人、夜討を志したる時の口上に、骸骨い
まだ(11・オ)乾ざるに、名は先達て朽ぬといひし一言、日本の武士
の骨ともいひて、いかにしてもいさぎよき口上なり。日本の俚諺に唐土
の虎は惜毛、日本の武士は惜名といひし言葉、よく本朝の武名を
いひ取たる諺なり。名を惜むは恥ある侍の心にて、義勇ともに名
を惜む中にそなはる名利など、つゞける意味にあらず。熊谷直実は私
の党の旗がしら、平山武者所末重もいづれも大名なり。生田の森の
軍のぬけがけは、立身知行の利欲にてはなし。たゞ名をおしみ、後
代までも(11・ウ)名をのこしたきとある。是日本の武士の気象なり。
日本の武士は戦場にて名こそおしけれ。すゝめや者どもとはげます

事、尤はぢある口上にて、唐土の武の格とは違ひ、いさぎよき事なり。

古平家の侍は、多くは女郎武士の如にありしが、中にも平知盛は武勇すぐれたる大将にて、段の浦にての口上、猛将勇士も運つきぬれば力なし。たゞ名こそおしけれ。四国の者ども軍よふせよと下知せられし体、あつぱれなる口上、其後最後の場にのぞんで、船のさうじせしあり（12・オ）さま、官女たちにむかひて、今にめづらしき東国武士を御覧なさるべしと大笑の体、これみな日本の武士は名をおしむの主意によくかなひたる事なり。士としてかやうの筋よく、熟味せずんばあるべからず。

凡尤といふ口上はかたちなしといへ共、大小厚薄天下の日用になくて、かなはぬ物なり。聖人の語は尤の上盛、賢人の語は尤の上々吉。それより段々さがりて、世儒の売講、寺々の夕談儀、道場の説法、辻街のかる口ばなしまで、皆尤を聞に行事也。」（12・ウ）只今は寺々の談儀の一切には味噌糟柄杓出して、聞賃を集るよし、聴聞の人の為には不尤の如なれ共、和尚の勝手には尤の儀ともいふべし。盗賊がごとき大盗も地黄煎を見て、椀に塗たらば、よからんと申も、悪の方からの尤、柳下恵が地黄煎を見て後、世遊人を養ふによからんと申も尤、とかく尤といふ儀は、善悪にさへぐそく仕たる事也。儒道神道は申に及ばず。仏法の八宗九宗にわかれたるも、皆尤を述たる教にて、人間の胸中はどれ成とも、わがすいた尤の方へ帰服いたす事也。脇

から世話をやくだけがない」（13・オ）尤の部に入べし。尤には其品かぎりなし。然れども、些の尤は大多の不尤に敵対ならぬ物なり。水は火に尅がもつともなれ共、孟子に所謂天目一杯の水にて、車一輛の柴の火は消れぬのたとへ、小き尤は大なる尤に勝事ならぬが、すぐに取も直さず尤の部也。道理そのけ無理の通るにと申俗間の語も、大無理には小き尤が敵する事ならず。周の末に当り、孟子一人が仁義の尤を諸国の王に説玉へども、一つも用ひ申王者なく、又不尤と聞たる王もなし。されども、ぬれ手にて粟をつかむ如なるこちらに、大欲と申」（13・ウ）不尤が稲麻竹葦のごとくにひかへあるゆへ、孟子一人の尤は埒があかぬ筈なり。かの借錢の出入を見るに、をせ方は丸々の尤づくめ、負方丸々不尤なれ共、済す事ならぬといふたゞ一つの尤が負方にあるゆへ、おせ方の尤もやゝもすれば丸損に成て不尤の部に入事多し。

講談といふ物、千座をかさねても、工夫見識の進むものにあらず、たゞ討習講論にて学問の昇進するものとぞ。釣針は曲れるを以て直してするといふ古語あり。尤」（14・オ）なる事也。いかに正直まっすぐなるがよしとて、君父兄弟のあしき事を行出しあらはすは、まっすぐなるやうの如なれ共、かへつてゆがみの筋になる事なり。君父のあしき事を他人評するならば、其悪を蔽ひかくす如にするは、ゆがみの如に見へて、かへつてこれを正直とする

なり。釣針のゆがみは釣針の為には正直なり。

古人の文字を制するや、我々ごとき節用集などを編述するごとき雑駁なる事にあらず。殊に身心を勞したる事と聞及べり。先吉の一字を「(14・ウ) 制するや、此一字は字数三万三千余字の中にも最上の文字といひ、易にても元吉と置て重き字なり人倫種々様々の品ありといへども、士といふもの上中下へ通達して、人倫の本道を得たるものなり。扱、其士たる者の口より出す一言は、善ならぬ事なし。これによつて士の口と書て吉の文字を制せり。士の口より出たる吉の字、容易なる事にあらず。士のつゝに武の一字を論ぜん。武の字は、庵にても歴々先儒止レ、戈為レ武と書せり。是先儒字義に見違ひありと見へたり。通史の「(15・オ) 内七音の所を見るべし。武の字は戈の下に止の字を書たるもの也。武士は常に太刀下にて一命を亡すを常とする心にして、さて音をとるに、戈の下に亡の字なればこそ、武といふ音を取たる物なれ。止といふ止の字にては武といふ音をとるべき七音の内縁なし。古人とても事多きゆへ、我しらずの匱相あり。いはんや日本にて出来たる本は、なを吟味せば、理の違もおほかるべし。すでに信濃前司行長は博学多聞にして古今に卓越せし才とゆるしたるものなり。平家物語を書しものにて、「(15・ウ) ことばに感勢ありて、譬者も節を付てうたふ程の物語の本なり。しかれども、平家物語の内高らの宮のむほんを書し所、曾て相少納言といひし人は、人相を見る

事に、妙を得て、一毛もちがはさねば、さすのみこといひしとぞ、かねて高倉の宮の御人相を見て、君はかならず位につかせ給ふ人相そなはり給へば、相かまへて天下の事思しめし捨給ふなどいひしかば、高倉の宮もそれを頼に思召て、むほんをおこさせ給ひ、軍利あらずして、光明山の鳥井の前にて、流矢にあたり薨じ」(16・オ) 給ひけり。かならず相人としもなければ、是は相少納言があやまりと書しは、行長が匱相なり。少納言が君は位につかせ玉ふ人相あり。御むほんをおこし給へとすゝめば、少納言があやまりなるべし。位につかせ給ふ人相ありといふは、少もあやまりにあらず。すでに後年にいたり、安徳天皇を平家取奉り西海へ落し、後は京都にて天子に事をかきて、やう／＼あそここより才覚して、高倉院第四の宮の四歳にておはせしを、法皇の御取立にて、位につかせ給ふ高倉の宮いはれざるむほんなしにもの」(16・ウ) ごとくに、わたらせ給ふならば、わきひらなしに御位は高倉の宮の物なり。しかる時は、相少納言毫釐も人相を見ちがへず、これ行長が匱相の見識ゆへ見ちがへたと。

負た子に教へられて浅い瀬をわたるといふ俚諺は、常におもひ合する事おほし。三近子が知れる方に貧儒ありき。六歳になりし男子往來を見し内、騎馬の武士供廻りさわやかにして通りける彼儒者の児、父にむかひ、我らもあのごとくなる武士に成たきがいかがしてなる事と問、父がいわく、あの」(17・オ) ごとくに成たくば、たゞ親に孝行にせ

よ。孝行なれば、かならずあのごとく威勢さかんの武士になるぞといへり。兎の曰、しからば爺御は親に不孝にありし物と見へたりと、父が貧をわらひければ、父も口をつぐみて、苦り切てありしとなん。

兎戯笑談卷之三 一 (17・ウ)

兎戯笑談卷四

中村平吾三近子撰

盜賊に帯一筋火箸一本など盗まるゝ時は、扱々にくき奴かなとて跡々まで恨みにくむ事、人情一致なり。しかれば、火事といふものは、帯火ばしの類にあらず。家財のこらず土さへやくにたゞざる事なり。

しかれども出火の人を後々までふかくくまぬはいかん。これ火もとは己が疎末からとは云ながら、おのれが家財一番にやけてしまふゆへ、類火の人数々の宝を一時に灰にしても、火出しを恨みず。一(1・オ) たんなふしてゐる事、諸人ともに仁心のある事かくのごとし。厚き事にあらずや。

上古の聖代にも洪水四海に漂ひ、天に滔れりといふ。禹という聖人に命じて洪水を納めさせ、人民難儀せぬ様に世話をやき給ふを仁政と云。聖人の御代にも水旱蝗の災ありて、万民なやみ苦めり。然

る時は、水旱蝗は天地の常なり。上にたつ悪主が仁政に志しなく、酔狂女色に迷ひ異物を弄びて、民の困厄にかまはず、驕を極むる時は、四海塗炭に落て、困究す。畢竟上(1・ウ)一人の仁と不仁との仕かたにて、民生死の境にたつ。天地に預る事にあらず。寺院も破壊に及び、朽倒れたるは、本尊の咎にあらず。住持が世話をやけば、再興になり、住持かまはねば、櫓も柱も塊となんぬ。家国の相続もみな領主次第の細工によるべし。領主如在もなく、志をはこび、憐愍し給ふを四の五のといふて、陰口にかけるは下民の咎なり。

鎌倉の古へ最明寺時頼は廉直の徳備はりたる人なり。鎌倉の下民に、雪中に金百両包て有しに、落したる主も、捨ひたる民家も、ともに相(2・オ)譲りしと五百年の今に至り、廉直の化を称嘆せり。是昔にあらず。今三近子が見るところ、廉直直下にあり。今住する借宅の隣家に貧家あり。或晨北野天神へ参詣せしに、七本松に革巾着落てあり。かの貧家とり上ア見れば、金銀とおほしき重さなり。

此男気の毒におもひ、彼巾着を懐中し、夕陽の時分までイみて、落せし人もありやと心がけしに、果して物を尋る人ありしかば、ねんごろに是を問ひ、巾着の中の員数も合ければ、其主に与へし。同町の向(2・ウ)家に富有の町家あり。先祖の忌日にあたりしかば、作善として十銭づゝをくゝりて、乞丐人に与へり。何百人と集り湊ひし中なれば、二度三度もらひしも有。又漏たる乞丐人もありし。東の方に飛の

きたる乞人居しを、亭主招きて錢を遣しければ、かの乞丐人蹲踞して、私わたくしは最初さいしょいたゞき候とて、其場ばを早く立去れり。是等これらの無欲むよく、近年こんねんにて見届まけたる事、鎌倉かまくらの無欲むよくの民家たみけと同日どうじつの談だんにして、何ぞ金銀きんぎんの多少たうさうを論ろんぜん。乞丐きがい人の十錢じゅうせんの心も百貫ひやくくわんの心も」(3・オ)無欲むよくは同前どうぜんなり。三近子さんしんこ一人ひとりの見し事みしことさへかくのごとし。まして日本にっぽん国中こくちゆうかやうの無欲むよく沙汰さた幾いく千万せんまんにん人にんともなく有あべき事ことにて、落おたるを拾ひろはずとある古風こふうの一奇いつきともいふべし。

大人たいじんは寛仁くわんにん大度たいどといひて、其もやう温和おんわにしてせわしからず、下々げげへ仁恵じんい慈悲じいを施ほし半事はんじこせつかず、大氣たいき活量かつりやうを以て第一だいいちとす。ケ様けさまの生質むまれつきにも、もしや無分別むぶんべつなる仕形しけいあれば、家老からう用人よにんなどいへる慥たしかなる臣下しんげありて、見物けんぶつはしていず、諫言かんげんを加かゆるゆへ、よい加減かげんになるもの也なり。小人せうじんは恭けい」(3・ウ)謙節けんせつ儉けんといひて、大小たいせうの事こと大事だいじにかけてつゝしみ、人ひとより跡あとにつく様さまにして身みを引ひき、少も大胆だいたんおごりのなき様に身みもちをするを能人よきひと柄がらといふ。皆みなしれたる事ことにして、古き口上くちがしなれ共ども、道德どうとくには新あたらしく氣きをかゆる事ことなければ、古人こじんの教戒けうがいをくどくいふ事也なり。近代きんたいは万事ばんじ洒落しやれをこのみ、新あらしくはづみたる事ことをすく人情じやうゆへ、山庄さんしゆう大夫だいふを賢人けんじんに立たて、金時きんときを臆病おくびやう者ものにいたし、猩々せうじやうを下戸げこといふやうにわるじやれを好このめども、孝弟かうてい忠信ちゆうしんの道德どうとくになりては、いか程か替かりたる」(4・オ)はづみをすき好このむ者ものにても、新あらしく不忠ふちゆう不孝ふかうがよいといふ人は、盜賊とうぞくの中なかケ間まにもなしたれ。人間にんげんにはもと性善せいぜん

のそなはりて有あることを知しべし。

人間の邪戾じやれいなるや、山やまといへば川かほと出て、とかくすまがふこと風俗ふうぞくのやうに成なたり。古ふるへよりの万書ばんしよ教訓けうくん、かりにも悪あくをせよ善ぜんはおこなふべからずとすゝめたることなきに、とかく反はんしてすゝめぬ悪あくき道みちに誰たれ々々もはまること、去逆さりとてはがてんゆかぬ事也なり。歌うたに

山守やまもりのきびしき程ほどのあらはれて折跡をるあとしげき山桜やまねづから哉や

此ここゝろも、人心にんしん山やまと川かほとすまがふたる心こころを讀よむと見みへ」(4・ウ)たり。山やまざくらは世よにたくさんにて、人のほしがらぬものなれども、此山このやま桜さくらは番人ばんにんきびしくまもりて、一いつし枝えだもとらさぬゆへ、ほしくもなき山桜やまねづからがにわかのぞみに望のぞみになりて、山やまざくらにひたと腰膝こしひざかゞめて所望しよぼうするゆへ、結句けつこ外の山やまざくらと違ちがひ、もらひ手て多おほきゆへ、折をれと大分おほぶんあるのこゝろをよめり。かくのごとくすぢりたる人心にんしんなれば、一向いっかうきれかはりて、不忠ふちゆうをせよ、不孝ふかうをせよ、不仁ふじん不義ふぎをせよとかへさまにすすめたらば、すまごふて善道ぜんどうも入いりべきや。たゞし下地したちは教寄すきなり。御意ごいはよしとて、もへくひの火ひ」(5・オ)のつきよき格かくにてめつたに悪事あくじを修しゆせば、是もあぶなきすゝめなり。

或人あるひとの曰いわく、孟子もうしに矢人やのねかち函人くそくの事ことを論ろんぜられし事は、就なかん耳みみ近ちかくして、文盲ぶんもうなる者ものまでも、よく心中しんちゆうに徹てつする事ことにて候まを。しかる上うへは面々めんめんの家業かぎやう体てい、子共しよさの所作しよさ等らもこれを初はじめにつゝしみて、楚忽そこつのふる廻まはずまじき事ことにて候まをといふ。三近子さんしんこが曰いわく、いかさま矢やの根鍛冶ねかちは随分ずいぶんと

よく人の肌も骨にも通るやうにと打出し、具足屋はいかなる劍戟矢の根鉄砲にても、裏かゝざる様に心を付てつくる」(5・ウ) 事なれば、矢の根鍛冶と具足屋とはあちらこちらにして、仁と不仁と其術にても分明にわかるゝ事なり。素より面々の所作がらにて、仁不仁はわかるといへども、諸人みなこれに心ありて、身の術をかんがふる程ならば、広き世上にさしつかへ不自由なる事有べきか。矢の根かちは不仁なりとて、世界の人、みな仁の方の具足屋に成たらば、自然の時は、敵もみかたも弓矢なしに成りて、具足着ても 受 べき相手なくんば、いな物にて有べし。大将の下知に従ふ士卒みな楠 正成がごとき勇(6・オ) 武なる者ばかりならば、食を炊ぐ者もなく、水を汲人にも事をかきて、いかばかり不自由の有べし。煙坊は人の 戸 を焼ものにてきたなき者なれども、煙坊なくんば諸人の不自由あげてかぞふべからず。女の所作にて 穩姿はいやなるわざなれども、此子取婆なくんば、世界の妊婦みな難産にくるしむべし。術つゝしまずんば有べからずとはいへども、善業も悪業もなくんば有べからざるか。世界の人のこらず仏菩のごとくならば、供仏施僧のわざもなく、結句の仏法は繁(6・ウ) 昌すべからず。仏とも法とも知らざる者たくさんなるゆへ、勤化もはづみありて、出家も昼夜隙なきけしきなれば、物事一がいにもいはれざる事おほし。

用心に索をはれといふ事あり。 盜繩を切て入るは心やすき事なる

べけれ共、あるじの心に油断せぬといふ用害にて、たやすく繩の内へは入事あたはず。俚諺に世はまじないといふ事、淳粹なる国風をほめたる物と聞へたり。土蔵を堅固にして幾重もかため、鎖す内にも油断すれば盜難あり。上無(7・オ) 欲なれば、これを賞すといへども、盜まじとあるやうに、多くの田畑野にみち、瓜茄子にいたるまで、ろくに垣をせざれども、一人も盜む者なきはいかん。これは戸ざす事もなく、番をする事もなく、大やうに捨てをくゆへ、其もやう賞するといふものなり。一向あてがふておけば手ざす人もなし。

性は由道 賢とはよくいふたる物也。松戴松が鬮牛の絵を牧童が笑ひし宣なり。さる色深き 土 禄も四百石とりし、いかにしても妻女嫉妬深きゆへ、悪性おもふまゝにならず。工夫とめぐらし、究竟(7・ウ) 一の思案を出し、ある時妻女へさて「こまり切たる事あり。今朝殿の仰出されに、家中の面々百石に一人あて、妾を召かへ候へと仰出されたり。我四百石の禄なれば、いやともに三人の妾召かへず候ては成がたし。ちか比当惑の至りといひければ、女房がいわく是は何の事も入らず、三百石上へ御戻し、百石にてわれ一人ばかりを持給へと云しと也。

金銀は土生金とて、元土なり。動かす時は埋合がたし。世俗金銀を調達するに、誰人も返弁の志 には如在なきといへども、借銀埋合ず。たとへば方一(8・オ) 間の穴を掘がごとし。掘上たる土を

半年も月日を経れば、もとの穴へ埋合されぬ物ぞ。かならず土がたらぬ物なり。堀上て二年も三年も経れば、いよ／＼土減少して、一向に埋土消滅す。元堀上たる土をもとのごとくに埋合しても足らぬ理なるを、もとよりうづだかく埋合せねば、土の元利いかんともすることなし。外を堀れば、外が明く。いづれの道にも動せば、埋あはされず。手出しなく無事にすれば、永代無事に納る事也。此沢山なる土さへかくのごとし。況んや金銀をや。」(8・ウ)

武士として種姓は面々ほしき物なるべし。これに依て筋目正しき武士といへり。武蔵坊弁慶がまたしても／＼天津兒屋根の御苗裔と陣中にて名乗しは尤なり。同じ四天二天の傍輩伊勢の三郎もさすが伊勢のかんらい義貫が子、上野の国板鼻の盜賊伊勢三郎義盛とは名のられまじ。長崎次郎は勇猛奮迅万夫不当の武士なり。最後合戦の時、馬をかけすへ、桓武天皇、第五の皇子葛原の親王に、三代の孫平将軍貞盛より十三代前の相模守の管領に長崎入道(9・オ)円喜が嫡孫次郎高重と事を欠たる旦那の系図を長々と名のりて、我父祖の事は小短く名のりしも、さすが弁慶ほどの系図はなかりしと見へたり。去ながら死際が涼しき故、耳にはたゞず。

唐子西の古硯銘に寿天の二つを含んで、筆の寿以レ日算墨之寿以レ月算硯の寿以レ世算と養生の為を述し意旨尤なる譬の様なれども、適当とはいひがたし。心身を動かし働らかす者は、

筆の働の様に早く損じ、短命ならば武内大臣は六代の天子に執政して、日夜心身を勞せし(9・ウ)かども、其寿三百七歳の長生はいかん。顔淵の渾厚なる少も心身を勞する事なく、硯のうけ身の如きも、三十二歳にて早世なれば、さして養生にもよるまじ。一生薬をのみつゞけにても中々性命ののびちゞみには預る事なかるべし。是ばかりは、如露亦如電と仏書の説、近道の学問なるべし。

人間は和といふもの、なくてかなはず。人生長久の基いなり。聖賢の氣象は専ら温和なれども、俗人は手を下しがたし。先和は従容といふて、心の融通(10・オ)として楽む事なり。常住古工面にし、翔拱の様に窺がざれば、寿命も短く、人の(任十必)添もなくして、我を人とはなれ／＼になる事也。和は無礼自墮落等の蕩にあらず。又究屈なる品にもあらず。たとへば、下賤の人、平生生理を稼ぎ子に臥し寅に起て働き父母妻子を養ふ事也。ケ様に間断なくして、扱盆正月節句、其外五十日三十日に一度／＼面々の和樂の趣き、芝居見物豆腐茶店に一盃酒をも酌氣を和すれば、自然と寿命も長久なるべし。」(10・ウ)

人家葬送の跡にて、門火をたく事、死人ふた／＼び帰らぬ様にとの事也といへり。さりとは、心得ちがひ也。唐にては、死人あればその死人の常の衣服を持って、中霤に升りて、北に向ふて復する事三日といへり。何とぞふた／＼び魂もかへれといふ誠心の厚き所よりかく

のごとく慕ふ事也。門火を焼てたましむ還らぬ様にといふは不仁の甚しきなり。

死人に四十九の餅をそなへる事、北斗七星壇にかたどり、七々四十九日の間に蘇生を祈る数にて「(11・才)吉をもとむる術なり。世人取ちがゑて四十九は不吉の数といふて、忌事余るといへば、愚痴成ル事なり。天地の極数は五十にとゞまり、一を大極とたて、四十九にて用をなす事、是洛書流行の用数なり。山崎垂加翁易の全数を掲て

一二三四五 六七八九十 貫得天地数 無レ過無二不及一
是生成の数をいひとる詩なり。

孟子の所謂「養浩然之氣」といふ事、宏大無比の論なれば、中々工夫も手の届く事にあらず。日本「(11・ウ)にても浩然の氣を養ふたる人も聞及ばず。しかし、壯き者は血氣優余して盛なるゆへ、身心屈せず、老人は血氣衰へ、次第に心ぼそく成ゆへ、菩提の心おこりて、おのづから血氣餓て乏しくなるにしたがひ、珠数振り、仏に合掌する事ならん。しかし、若きものゝ数珠つまぐりは、見聞も甘過たり。老人の数珠なきも木強なる様に覚ゆる事ぞ。

良禽は木を撰んで棲とは不易の金言也。九郎義経の郎等は十余人、一騎当千の勇名「千」(12・才)歳に残りて朽る事なし。これ良将英雄の主をもちし故也。蒲の範頼は義経の兄なり。郎等にも定て勇剛の士、大方あるべきなれども、主人が愚将ゆへ一人も名をとゞめず、皆

骸骨に先だつて朽ぬ。

慎と驕とは榮枯地を易る物也。楠正成纔八百の人数にて千劍破の城を防ぎしに、寄手は百万騎に余りたる也。毎日の戦に寄手五六千人程手負、討死せりとぞ。楠が勢鉄石にあらず。相州の猛勢多を奮けるゆへ、毎度敗軍せ「(12・ウ)り。大勢をたのみにするといふが驕なり。楠小勢ゆへ、士卒みな大事にかけ慎む所より、毎度軍に勝ける故に、大将はいかにも謙遜に居て、驕らぬ所より長久なり。勝て兜の緒を占るといふは他なし。慎の一字に帰す。

堯舜の如き性の粹なるはいかなるゆへと、其極意を推釋ても、其趣意しれず。然れば、仏家にいふ過去の因縁といふも捨がたきや。

人々の生得に念を入る人あり。是を俗に念者と云。其念の根本は慎の徳より出たり。故に「一念者」(13・才)はあやまちなく、無妄の災にもあわぬものなり。念者の徳に別して、火の用心に念をあるゆへ、生涯手あやまちもなく、盜賊の難もなし。万事につけ、僂末の志より、いろ／＼の難おこる事なり。しかし、ぐど／＼と入ほがに念をある時は、かへつてさしつかへる事も有べし。論語に季文子三思ふて成、これ念の入たる事也。孔子再びせば可也と仰られし余り、念が入過れば、事に臨んでさしつかへにもなる事をいましめ給へり。大名の祝言の能に竹生島の番組出たり。大切の御祝言こと葉「(13・ウ)に不吉の文もありやと大夫もわきもしらべ吟味せしに、こゝを隔て行

程にの文句、御祝言には不吉なり。浦をながめて行ほどにと直して、随分口づく様にあらかじめ熟せり。能の当日になり、竹生嶋別してよく出来、はやし方もそろひける故、地謡もつれも、我をわすれて浦をへといふ一字の境にて、みなおもひ出したれども、もはやへとかしら字をいひ出したれば、ぜひもなく、浦をへがめて行ほどにとこたひしとなん。季文字の格にて、余り念の入過たるも却てつかへになる事あり。」(14・オ)

天には万民を恵といふ職分あり。人間は其天の冥加をうけて勤るといふ職分あり。天と人と両輪相もちといふ所を下々まで理会したき物なり。天働くゆへ人働く。左輪動けば、右輪行。此ことはりに心を付、須臾も家業に怠らず、身は右輪となりて間断さへなければ、大に生理を安んずる事也。人間生いづれか果報のいみじきを嫌者あらん。願ふに、分気来るといふ俚諺も、天理を我が勤と牛角に釣合てこそ幸も来るべけれ。家業も勤めず。無性わざをかまへて、心にのみ」(14・ウ)分気を期するは片輪車にして、一寸も行事あたはず。北野天神は、靈験殊に掲焉とて、諸人頭をかたづけ、偈仰甚し。いかに靈験有とて、非礼は享給はじ。天神は天なり。かならず正道に荷担し給はん。童蒙みな文道の大祖として、手跡の上達を天神へ祈る事、其志は尤なれども、いかに天神の慈悲にも手習をもせずして、手を懐にして祈りたる者には、冥加を施し給ふ相手なし。むかしより、

俚諺に果報は寝て待といふ事あり。下々はこれを心得ちがひして、僥倖」(15・オ)はとかくねるゆへ来るとて、たゞ寝に臥もの多く、苦々しき心入なり。果報は期すべからず。無我無心の所より、自然と至る道理なり。寝ると云ものは、貴賤ともに臥したる間は、無我無心なり。故に果報は無我無心にて待てといふ心なり。果報は大かたはまちぼうけに成ものなれば、其所へは貪着する事なく、下々は子に臥、冥に起て稼べし。

卑賤の言葉に、五銭が油を燃して、三銭の生理をつとむるといふ事あり、尤なり。五銭が油は手を懐にしても、とほさでかなはぬもの也。三銭の生理」(15・ウ)をする時は、油のあたひ二銭にとゞまる。かやうに、生理にゆだんなく、階級を越ぬ善念がつもりて、富有の門にさかへ、寿考かぎりなく、子孫榮利に至る事、是たゞ驕らぬといふの善念が種と成て、かくのごとし。朱子曰、勤儉治家之本と。誠なる哉。

世人異を好む筋より、近代は教訓の書も虫鳥の問答に仕かへ、淨留理本さへ、山庄大夫を慈悲者につくれば、是は新らしきといふてもてはやすといふども、皆古人のいひつくしたる言葉の味噌糟をねぶりて、新ら敷やうに住居をかへたるばかりにて、」(16・オ)飛切たる発明もなく、見ぎめがするもの也。ある大名の家中屋敷に化物住て、人をすまさず、久しく荒やしきと成たり。こゝに新参の軍学者ありけるが、

もとより忠義の士にて、なんぞや殿の御領地におめ／＼とばけ物を住さんやと勇氣を出し、かの屋敷を拝領してうつりたり。其夜丑満の時に、座敷の庭に其長十丈斗の大坊主立たり。かの士ちらりと見て、古し／＼と云。ばけ物消て美女になる。それもふるしといふ。或は鬼となり、火の玉に成り、ちいばゞ、あるとあらゆる物」(16・ウ)に化て見せけれども、一つ／＼古々といふゆへ、此化物もかの士にはもてあまし、其後ばけ物は来らざりき。太守聞たまひ、前代未聞の勇士と、まづ当座の御ほうびに金三百兩拝領す。かの士有がたしとて、家中心やすき朋友、其外親類まじりに御ほうびのひろめを致し、かの三百兩のほうび金を三方にのせ、床の前に置。酒宴闌にして、夜もふかく深ける比、俄かに天井ばた／＼と人の足おとすさまじく聞えし故、諸人すはや、件の化物よとひしめきしに、かの士少もさわがず、千」(17・オ) 変百怪なんぞおそるべけんやとそらを急度見あげし時、天井より熊の手の如き長き手をさし下し、かの三百兩の金をつかんで、天井へもちゆき、何と亭主あたらしかろがやと高声に云て、同音にどつと笑ひしといふはなしも、一花はおもしろく、二度はうるさし。近代の邪作の書物も大かた此格多し。

「児戯笑談卷之四」(17・ウ)

(広告)「(18・オ、ウ)

中村三近子撰述

俗字指南車 全一冊 板行出来

六諭衍義小意 三冊 同 出来

児戯笑談外篇 四冊 追而板行

寛延二年巳霜月 江戸通本町三丁目

西村 源六

京堀川通錦小路上ル町

西村市郎右衛門」(19・オ)

謝辞 本稿の翻字の再確認を、巻三・九州大学大学院博士後期課程村上義明氏、巻

四・九州大学大学院博士後期課程吉田宰氏にしていた。この場を借りて感謝の意を表したい。

(わきやま まい・伊万里特別支援学校)